

研究概要報告書【音楽振興部門】

(1 / 1)

研究題目	シンガポールの南音:形成、担い手たち、音楽の伝承とそれに関わる海外ネットワーク	報告書作成者	伏木香織
研究従事者	伏木香織		
研究目的	<p>本研究は、シンガポールにおいて実践される「中国」の「古典音楽」である南音は、どのようにしてシンガポールにもたらされ、演奏されるようになりどのように継承されているのか。これをクリエイティブ・インダストリー、クリエイティブ・シティ論、それとともに関連する概念であるヘリテージ Heritage の形成という視点から読み解き、彼らの活動と音楽がシンガポールにいかなる影響を与えているのかを探ろうとするものであった。</p> <p>南音 Nanyin(なんいん)は南管 Nanguan(なんかん)とも呼ばれる音楽で、中国南部沿岸州のひとつである福建省、ならびに台湾を中心として演じられている古典音楽のひとつである。福建省ならびに南洋 Nanyang(なんやん、東南アジア地域に移住した華人たちは自らの住む地のことを南洋と呼ぶことが多い)においては、多くの場合、南音と呼ばれ、台湾では南管と呼ばれるが、広い地域で南音と南管とは同じ音楽であると認識されている。</p> <p>南洋における南音は、多くの場合、福建語話者のグループによって演じられてきた。しかし、シンガポールにおいては、クラン・アソシエーション(宗族、宗親会、同郷会)の単位で形成されたのではなく、それらの人々の間で横断的に、同好会として形成されたのであり、弦友と呼ばれた同好組織のメンバーたちの構成は時代とともに移り変わっていった。そして中国語教育が衰退し、方言話者が減少するなか、担い手たちもまた減少していき、音楽の衰退が目に見える形で現れてきたのである。</p> <p>南音のグループは、メンバーを公募するようになり、音楽の演奏だけではなく、新たな演劇作品(新作梨園戯)を生み出し、役者たちを育てていった。また国際大会を開いて各国と連携し、盛んな交流事業を持つ一方で、それらの活動のために新たな創作作品(楽曲)を多数生み出したが、この中心にいて、広い地域における南音の活動の活性化に大きな役割を果たしたのがシンガポールの南音演奏団体「湘霊音楽社」の丁馬成である。彼の活動は、南音が泉州の芸能として無形文化遺産に認定されるのに大きな役割を果たした。</p> <p>彼の死後、1990年代以降は、南音のグループでは、南音という音楽への興味を喚起すべく、より「近代的な」「チャイニーズ・オーケストラ」の形成に関わり、その活動のなかで、より古典である南音へ次世代の担い手たちである子どもたちを導くようなアプローチをしていった。シンガポール政府が、自分たちのルーツとして「古典」音楽、あるいは「伝統的な」音楽を創出し、シンガポールの「チャイニーズ(華人)」音楽を作り上げるなかで(中国語をベースとし、中国文化に由来する芸術一般を「華芸」と呼ぶ)、自分たちが継承してきた音楽と、継承のために新たに創作した音楽を存続し、盛んに演奏活動を行うほか、新進気鋭のプロデューサーを招いて、現代の舞台芸術として、新作舞台作品を生み出している。こうした活動は近年、シンガポール政府にも注目されるようになり、海外公演や若手育成のための海外研修派遣、研究会や国会図書館での研究展示、シンポジウム、公開レクチャーなどの形で、多くの支援を受けられるようになっている。</p>		

研究内容

シンガポールにおける現地調査では、特に湘霊音楽社と伝統南音社を中心に、南音を担う人々と、その音楽社の設立の歴史、学習方法、小中学生への文化教育活動、上演活動、伝承活動のあり様を調査した。なお、当初調査対象に入れていた蕙菜芭城隍廟芸術学院では、指導教員の中国への帰国(任期切れ)により、その時期、クラスが開講していなかったことから、調査対象外とした。なお、この芸術学院の教員を務めていたのは、かつて湘霊音楽社の招きで来星し、湘霊音楽社と長く活動を共にした人物である。

湘霊音楽社では、初心者向けの歌のクラスや琵琶のレッスンへ参加しながら、所有する建物内に資料館(ミニ・ミュージアム)を新規オープンする際に発掘、整理された史料、新聞の切り抜きなどのアーカイブと楽譜、楽器などの調査を行った。調査計画段階では、まだ資料館は成立しておらず、史料も整理されていなかったのだが、2012年8月にはすでにある程度、整理が進んでいた。ただし、研究者向けに整理されたものではなく、また包括的な集め方をされたものでもなく、展示に関係のないものは環境のよくない倉庫などに山積みになっている部分もあって、史料の目録等もなく、どんな史料があるのかについては把握しにくい。そのほか、現在の社長ならびに丁馬成から社長を引き継ぎ、現在は副社長となり実質的に湘霊音楽社の中心人物となっている王碧玉、また「湘霊ベイビーズ」と呼ばれた若手世代(現在、専門学校～高校生)7名へのインタビュー、活動などの調査を行った。王へのインタビューは長期間にわたって複数回行われ、そのなかで、丁が湘霊音楽社の社長となってから、どのような活動を行ったのか、彼の創作活動とはいかなるものだったのか、音楽社という組織の運営はどのようなものであったか、教育活動やメンバー増員のためにどのような形で活動を行ったのか、といった音楽社の歴史と丁の活動、つくった作品、ならびに丁のライフ・ヒストリー、そして丁の夫人たち(歌手であった)についての情報を得た。また丁が死の直前に社長を指名して譲った王は、当時20歳代の若手の女性だったのであり、それに伴う混乱と苦労についても、インタビューでは聞き取ることもできた。なお、女性が音楽社の社長になるなどの行為は、伝統的価値観からはありえなかったことであり、それ故に、彼の死後、その他の活動方針の違いなどが明らかになった段階で、丁と同世代の老年層の演奏者たちの分離を招くことにもなった。なお、王の母は丁と同世代人であり、分離独立して伝統南音社を設立した人々とまだ交流があるため、彼女と、湘霊音楽社の若手を通じて、伝統南音社での調査が実現した。

伝統南音社の調査は、現在の社長と事務局長に対するインタビューが中心であった。「伝統をそのまま継承すること」を最大の目的とするこの音楽社は、湘霊音楽社の創作活動に批判的で、丁馬成の死後、湘霊音楽社より分離独立した人々であった。湘霊音楽社がかつてより使っていた楽譜群を継承し、彼らが日常的に演奏活動に使うのは民国元年(中華民国元年=1911年)の楽譜(コピーを主として使う)、湘霊音楽社が戦後、中国より招いていた講師たちが手書きした楽譜である。またつい最近になって、外部からの委託により、モダンダンスとのコラボレーションの舞台に出演したことがあったが、「伝統的」な演奏スタイルと楽曲形式を壊さないことを前提として引き受けたため、その作品には新規性はない。彼らの「伝統」にこだわるスタイルは、国内での継承活動を困難にし、シンガポール国内に継承者たちを

育てていないため、この音楽社の伝えてきた楽譜等は、現在、南音が無形文化遺産指定された都市である泉州の博物館へと寄贈されようとしている。しかしこの「伝統」を守ろうとする態度は海外の演奏団体を惹きつける魅力となり、フィリピンやマレーシアのグループとの相互訪問が盛んに行われている他、「泉州」という言葉だけを共有する「泉州尺八会」(日本、南音とはまったく異なる音楽を奏するグループである)などがこの音楽社を訪問し、短簫などを学んだりすることがある。

南音の実践については、寺廟などで行われる演奏活動や、それらを担う老人たちの活動も調査の対象とした。しかし、その担い手の多くは前述の湘霊音楽社、伝統南音社のメンバーであることが多かった。それぞれの音楽社として演奏を行うほか、小さな寺廟での奉納演奏においては、両者の枠組みを超え、演奏できるものたちが寄り集まって奏するなどの場合も見られた。しかしながら、近年でこそ、南音に注目が集まるようになったため、ごくわずかに演奏を寺廟で見ることができるものの、通常はほとんど見ることができなくなっているのも事実である。湘霊音楽社は年3回行われる観音誕に、天福宮、クス島(の寺廟)などで初心者たちの発表会を兼ねた奉納演奏を行うが、これが寺廟で行われる最も大きな演奏機会である。なお、今回の調査からははずした萑菜芭城隍廟芸術学院は、萑菜芭城隍廟という寺廟に付属する芸術学校で、この寺廟では春節(チャイニーズ・ニューイヤー)などの際に、中国から南音を芸術学院で専攻する学生たちを招聘して公演を行うが、これは奉納演奏とはまた異なる形式である。

なお、その他、南音に関する研究や、文化行政、アーカイブズについての調査は、主としてシンガポール・ナショナル・アーカイブズ、図書館等で行った。ナショナル・アーカイブズでは個々人の記憶や記録を集積し、シンガポールのパブリック・メモリーや、無形文化遺産を含む、物質として存在しえない形の文化を、ヘリテイジとして確立しようとする試みが行われている。2011年にはかなり収集率がよかったものの、現在の収集率は多少下がっており、人々の関心が国立アーカイブズのプロジェクトから薄れていく傾向が感じられる。しかしながら、国立の機関によるプロジェクトを離れて、一般市民の活動のレベルで、南音を始めとする音楽や芸能、特に路上に主として展開されてきたような人形劇や戯劇に関する関心が高まり、現在はその活動をサポートし、ヘリテイジとして確立し、その芸能を創造的に存続させようとする動きも見られるようになっている。

研究のポイント	<p>湘霊音楽社と伝統南音社を中心に、南音を担う人々と、その音楽社の設立の歴史、学習方法、小中学生への文化教育活動、上演活動、伝承活動のあり様を調査。</p> <p>昨年 70 周年を迎えた湘霊音楽社(前史を含む)を中心として、晋江出身者の集まりの中で始まった南音の同好会活動が、他地域出身者にも広がっていき、主としてそれらのメンバー(弦友と呼ぶ)の家族などを巻き込む形で次世代に育まれていったことが、湘霊音楽社の所蔵資料と王へのインタビューで明らかになった。また丁時代の湘霊音楽社が、台湾やフィリピンなどの音楽社に梨園戯を教えたり、演出にいたりして、積極的に作品製作に関わっていたほか、国際大会の開催を提唱し、その実践をめぐって、率先して短い、現代曲を創りだしたこと、またそれまで南音に使われていた言語は日常語(白字)に近いものであったが、丁が音声を古典雅語のものにするなどの改革を行ったことも、所蔵資料調査と王へのインタビューから明らかになったことである。さらに王ならびに指導者たちへのインタビューから、楽曲の継承方法、梨園戯の演目、脚本、所作の習得方法、中国からの指導者招聘やその挫折など、丁の死後のシンガポールにおける南音の苦節が明らかになった。</p> <p>その一方で、1990 年代後半、シンガポール政府は英国式のクリエイティブ・インダストリー概念をいち早く取り入れ、各種の芸術祭を作り出し、芸術観を大きく変化させた。「華芸」を始めとする、「エスニック・グループ」ごとの芸術祭を企画するようになったほか、積極的に芸術振興策を施行していったのである。その際、芸術を生業としてきたプロフェッショナルの劇団たちに対しては、援助が打ち切られ、変わってアマチュアたちの芸術活動に補助金がおけるようになった。南音はこの施政の恩恵を受けたもののひとつであるが、こうした施策を利用して展開された芸術教育活動についても、湘霊音楽社所蔵資料と国立図書館等のデジタル史料などを利用して調査を行った。</p> <p>その他、湘霊音楽社の活動を積極的にサポートする市民たちの活動に参加したことで、その援助活動が、人々の記憶をつなぐ無形文化遺産であるところの「ヘリテイジ」を構築し、それを維持する目的をもち、その役割を果たしていることも明らかになった。</p>
研究結果	<p>本研究の成果の一部は、2012 年 10 月 9 日にコンサート・ホール「パウゼ」で行われた講演会において、すでに公開しているが、1 月の追加調査分のデータを加えたものを 2013 年 8 月にマンチェスターにて行われる International Union of the Anthropological and Ethnological Studies (IUAES)の大会において発表予定である。その原稿は現在執筆中のため、7 月末に提出の予定。</p> <p>シンガポールにおける南音は、移民たちが持ち込み、伝えた音楽ではあるが、そのルーツは福建省泉州にあったわけではなかった。中華民国期の福建省各地から寄り集まった移民たちが、晋江の人々を中心にまず集まって弦友の集まりを結成し、そこから徐々に出身地の枠を超えて、福建語を話すシンガポールに暮らす人々を巻き込んで音楽活動がゆるやかに広がっていった。晋江などから弦友仲間を通じて講師を招き、自ら楽器を製作したりしながら、南洋ならではの音楽社のあり方といったものが形成されていた。ショップハウスの 2 階から始まったその音楽社は、やがて、丁という才能を得て、新たな創作活動を始める。</p> <p>自分たちで楽しむための音楽だけではなく、近隣の子どものたちの興味を引き、それらの子どもたちを招き入れるために梨園戯の活動が</p>

	<p>行われ、役者や音楽家たちを積極的に集めるために新聞などを使った公募も行われた。さらに王月華(丁夫人)が英国で行われたフォークソング・コンテストで入賞したのをきっかけに、南音に関する関心がシンガポール国内はもとより、諸外国においても高まったことで、丁はますます南音の活動を盛んに行うようになった。</p> <p>そのなかで最も力を注いだのが、新作梨園戯の創作、演出と、国際南音大会の開催である。特に国際南音大会では、文化大革命によって壊滅的打撃を受けていた中国の各音楽社に対し、シンガポールやマレーシア、フィリピンなどを始めとする音楽社たちが連携して支援を行ったほか、こうした機会に演奏するのにふさわしい小品が少なかったことから、丁自身が300を超える小品を生み出した。これらの楽曲は丁馬成作品集としてまとめられ、国際南音大会で共通して歌われる楽曲のひとつとなっている。そしてこの南音の国際大会の活動を通じて、丁の亡きあと、泉州を中心とする地域の無形文化遺産としての南音を推進する動きが中国内外で広がり、ついには南音が無形文化遺産指定されるにいたったのであった。</p> <p>しかしながら、シンガポールの伝統南音社がそうであるように、各国の南音の音楽社すべてが丁の音楽を受け入れたわけではない。現在、湘霊音楽社の若手たちがシンガポール政府の助成を経て、年に1度修行に行く、福建省泉州の郊外都市石獅の指導者たちも、丁の作品に対しては批判的である。シンガポールに招かれ、南音を演奏する機会があっても、ほとんどの場合、丁の作品は「南音ではない」として、演奏に加わらないなどの確執もある。</p> <p>移動する人々が移動のなかで育んだ南音という音楽は、シンガポールという地で独自の形態を持つようになった。そしてその独自性をもつようになった南音は、「華芸」としてシンガポール政府の援助を受ける対象となった一方で、それとは異なる形で、シンガポールという地に暮らす人々の記憶の集積、無形文化遺産としての「ヘリテイジ」としても見出され援助される。現在、南音の活動は2種類の方向性(政府からのアプローチと市民からのアプローチ)をもつようになっているのである。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>本研究は、以前より行なってきたシンガポールの芸能に関する研究のごく一部である。それでも今回、シンガポールにおける南音に関して、全体像を掴みきれたとはいきれない。今回、シンガポールと諸国に展開する音楽社との関係性は、シンガポールを中心とした視点でしか捉えられていないが、インドネシアやフィリピンなど、交流が盛んな地域を含めて、それらの地域でどのように見られているのかについても調査、研究が必要であろう。また現在、シンガポール政府の助成を受けて、中国(福建省)、台湾、韓国などの海外で、積極的に公演、レクチャー、シンポジウム、交換教育プログラムなどが行われているが、それらの国々に赴くシンガポールの南音の担い手たちが、シンガポール以外の地で自らをどのように語り、どのようなレパートリーを演奏するのかについて調査する必要もあるだろう。これを通して、シンガポールの担い手たちの意識を探ることができるはずである。日本でも公演、ワークショップ等を行いたいと言っていることから、日本公演、日本の大学や教育機関などでワークショップなどを実現させることも今後の課題である。</p> <p>1980年代を最後に、シンガポールの芸能を総括的に紹介する文献はほとんどなかった。本研究の成果を一部として含む、シンガポールの各芸能の現状については、なるべく早く、論文の形で紹介したいと思っている。</p>

参考写真



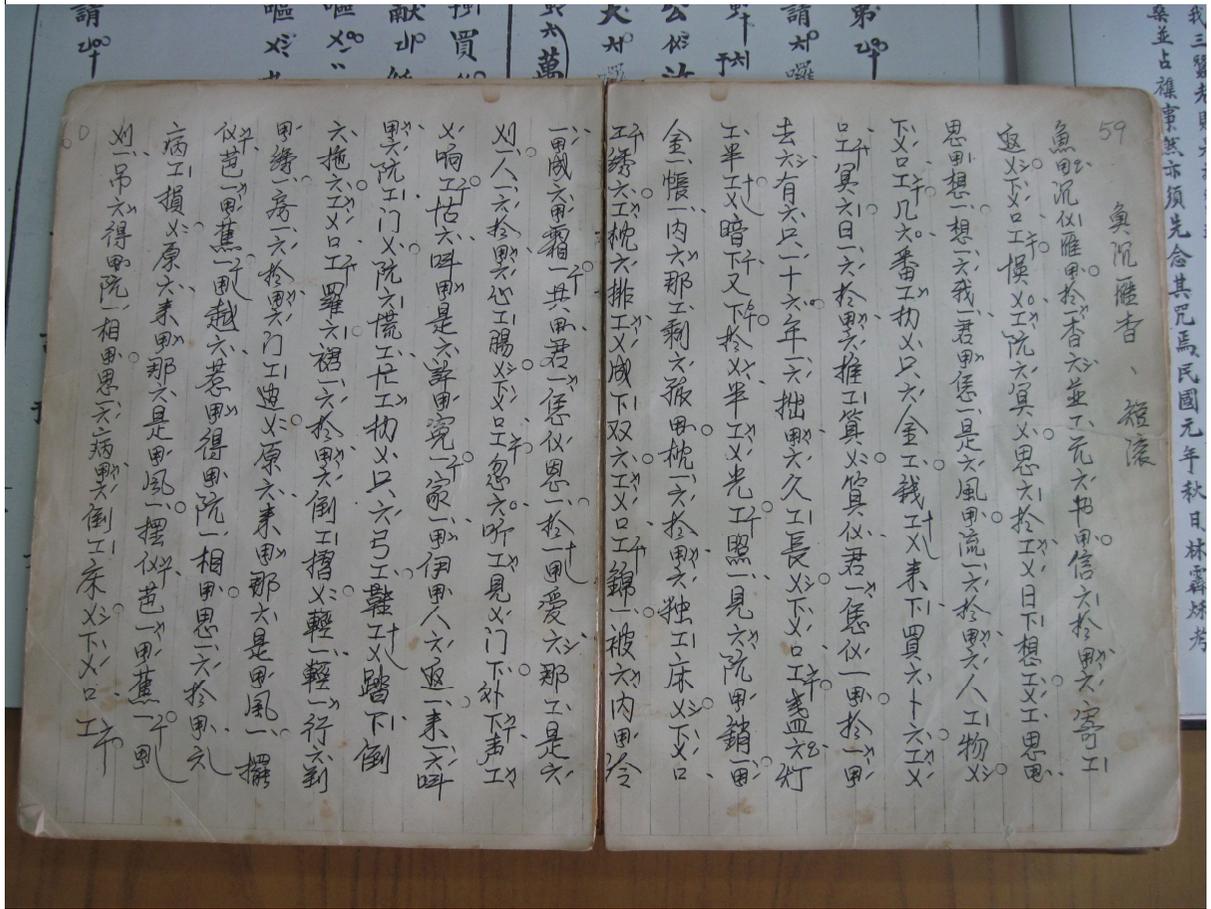
天福宮における南音の演奏(観音誕)



湘霊音楽社 70 周年記念イベントにおける梨園戯



伝統南音社で南音琵琶を弾く



伝統南音社が使う手書きの工尺譜

(注:写真, データ, グラフ等 研究内容の補足説明にご使用下さい。)